

富山県上市町

弓 庄 城 跡

第2次緊急発掘調査概要



1982年3月

上市町教育委員会

発刊にあたって

近年、全国各地で進められている地域開発は、地域の文化財との間に、いろいろな軋轢やトラブルを生じさせています。しかしながら、文化は人間の所産であると共に人間の生き方そのものが文化の表現であります。文化財は、心のふるさとであり、先人の心であります。地域の歴史を伝える文化的伝統を守り、伝え、更にはその上によって新しい地方文化の創造を目指すことが文化財保護の理念であり、現代に生きるものの責務であると信じます。

このたび、上市南部土地改良事業にともない、弓庄・館城跡の保存が問題となり、そのための協議を重ねた結果、一部、発掘調査を含む現状保存の方法を採択しました。弓庄・館城跡は、県内でも大きな中世の城跡の一つで、出土品も北陸を初めとして、各地から伝波したものと、遠くは、中国から渡来した陶器も含まれています。これらの成果をもとにして上市町の歴史、ひいては、北陸の姿が少しでも明らかにできれば幸いです。

昭和57年3月

上市町教育委員会

目次

例言

発刊にあたって

例言

I 遺跡の環境	1
1 遺跡と周辺	1
2 弓庄・館城の概要	1
第I図 地形と周辺の遺跡	1
II 調査の概要	2
1 調査の経緯	2
2 第1次調査	2
3 第2次調査	2
a 第1期調査	2
b 第2期調査	2
第II図 地形及び区割図	3
4 A地点の調査	4
a 1区	4
b 3区	5
c 5区	6
d 7区	7
5 B地点の調査	8
a 1区	8
b 第2期調査	9
a B地点	9
b C地点	9
c D地点	9
d E地点	9
e F地点	10
III まとめ	11
引用、参考文献	12
第3図 A地点3区出土遺物・第2期調査出土遺物	
第4図 第2期調査出土遺物	
第5図 A地点1区発掘区及び出土遺物	
第6図 B地点1区発掘区及び出土遺物・A地点1区出土遺物	
第7図 A地点3区発掘区及び出土遺物	
第8図 A地点5区発掘区及び出土遺物	
第9図 A地点7区発掘区及び出土遺物	
図版 1 A地点1区・3区	
図版 2 A地点5区・7区	
図版 3 B地点1区・第2期調査	
図版 4 A地点1区・3区出土遺物	
図版 5 A地点5区・7区出土遺物	
図版 6 B地点1区・第2期調査出土遺物	
図版 7 金属製品	
図版 8 木製品	

1. 本書は、団体営ほ場整備事業（上市南部地区）・県営ほ場整備事業（上市南部地区）に伴う富山県中新川郡上市町弓庄・館城跡の第2次発掘調査概要である。調査は、第1期昭和56年5月19日から同年8月21日の団体営ほ場整備事業箇所と第2期 昭和56年11月16日から同年12月26日までの県営ほ場整備事業箇所の範囲確認調査を実施した。なお、調査面積は、第1期調査 2,900㎡ 第2期調査 2,000㎡であった。
2. 調査は、国庫補助金及び、県費補助金の交付を受け、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けて、上市町教育委員会が実施した。
3. 調査事務局長は、上市町教育委員会におき、社会教育課長 井戸川義邦（昭和56年4月1日～9月31日）同課長 荒川武夫（昭和56年10月1日～昭和57年3月31日） 同主事 広島志志が、調査事務を担当した。また調査期間中、文化庁記念物課・富山県埋蔵文化財センターの指導を得た。
4. 調査参加者は、次のとおりである。
調査担当者、富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事 酒井直洋・上市町教育委員会社会教育課文化財保護指導員 高慶孝。
調査員、富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事 山本正敏 調査補助員、有馬明吉・山村邦郎・阿部浩一・本江住一・土肥直夫。
調査参加者、山村一見・塾島一郎・塾島松造・町田喜久雄 阿部三雄・藤巻一・島津弥三郎・松本三郎・黒山正義・伊井健治・町田フミ・竹林セキ・若木ケイコ・森井アヤ・水野マコ・細川菊子・穂田瑛子・穂田ハナエ・穂田スミ子・穂田道子・穂田ヤイ・穂田トモコ・穂田成子・穂田フキ子 穂田一恵・山崎スミ子・関のぶ・野村菊枝・小川ミヨ・松崎幸枝・石黒ユエコ・室島洋子・寺島礼子・中川洋子・城能菊井。
5. 本書に掲載した、遺構実測図は、酒井・高慶・山本・有島山村・阿部・本江・土肥が作成した。写真撮影は、遺構を、酒井・高慶・富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事 狩野が行なった。遺物の写真撮影は、高慶・酒井が、狩野・富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事 橋本正春・株式会社 チューエフ 写真部の指導を受け行なった。遺物の整理・実測・トレース等は、酒井・高慶が、富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事 上野章・岡、池野正男の協力を得て行なった。
6. 本書の編集・執筆は、富山県埋蔵文化財センター職員の手助けを得て、酒井・高慶・橋本正春が分担して行ない各々の責は、文末に記した。また、地点・区割等は、昭和55年度の調査のものに一致させることとした。また、一部昭和55年度調査箇所を収録した。

I 遺 跡 の 環 境

1. 遺跡と周辺 (第1図)

富山県中新川郡上市町は、富山県の南東部に位置し、立山連峰の霊峰大日岳に源を発する上市川を中心にひらかれた町で、この町の中心部から南へ約2km、町の南東部を流れる白岩川ぞいの柿沢・館内地区に在するのが、弓庄・館城跡である。本遺跡は、正平年間(南北朝期)の頃より、中新川一帯を支配した土肥氏の居城であったとされている。現在この一帯は、そのほとんどが水田として利用されており、地割などの旧状をわずかにとどめているだけであるが、堀跡の水田などは、多少の高低差を見せている。

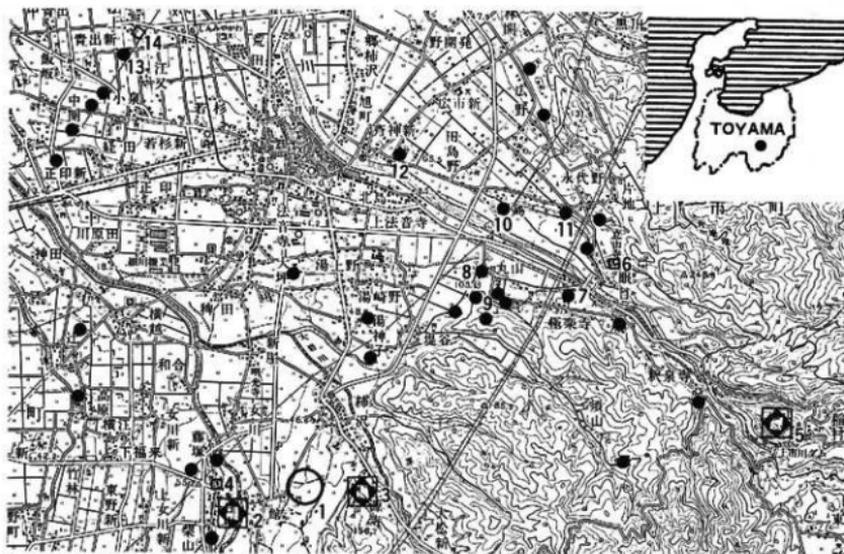
城跡の周辺には、佐々成政が弓庄城を攻めた時の拠点、日中砦跡、弓庄城の北東、梶形山の郷田砦跡、また土肥氏の奥城であったとされる茗荷谷山城が梶形山のさらに東側、城ヶ平山の山腹に在する。この他、郷柿沢館・稲村山城跡などの館・城跡、眼目山立山寺・大岩山日石寺などの土肥氏ゆかりの寺院もあり、往時の土肥氏の姿をうかがい知ることができる。

2. 弓庄・館城の概要

弓庄・館城の城構は、今までの所「土肥家記」(有沢永貞著、金沢市立図書館蔵)の付図「弓之庄古城之図」による所が大きい。今回行った、試掘調査でも、この付図が比較的信頼度の高い史料であることが立証された。

城は、いわゆる連郭式襷張りを持つもので、本丸を中心に、北へ細長く郭をのびた形で、二の丸・三の丸と続く。また、東は、屏風のように山地がせまり、西は白岩川に面しており、自然の要害を形成している。また白岩川は、水運の便にもなっていたようで「舟つき場」という小字も現在残っている。このような地形とあいまって城をめぐる堀、西側の「フケ田」は、城の防衛をより強力なものとしていたと思われる。

(高慶)



第1図 地形と周辺の遺跡 (1/50,000) 1. 弓庄城跡 2. 日中砦跡 3. 郷田砦跡 4. 日置神社跡
5. 稲村城跡 6. 立山寺 7. 極楽寺遺跡 8. 丸山A遺跡 9. 眼目新丸山B遺跡 10. 野島遺跡 11. 永代遺跡
12. 齊神新古墳群 13. 江上A遺跡 14. 江上B遺跡

Ⅱ 調査の概要

1. 調査の経緯

町指定文化財・弓庄城跡は、柿沢・館地内に所在する。同地内は、昭和53年度より団体営ほ場整備事業が実施されていた。昭和55年度の工事区内には、弓庄城跡北西側部分が含まれることが予想された。そのため上市町教育委員会は、遺跡の範囲・状況を把握するための調査（第一次調査・第1期）を実施した。この調査結果をもとに上市町教育委員会・県埋文センター・県ほ場整備課・地元土地改良区による4者の協議が行われ、昭和55年度に1部の発掘調査（第1調査第2期）を行なうこととした。しかし、工事対象区北側部分約1万㎡は、56年度に調査しほ場整備を延期することとした。昭和55年度の発掘調査面積は、予備調査（第1期）本調査（第2期）合わせて約2500㎡である。

また、昭和56年度以降には、弓庄城の東側約7万㎡部分が県営ほ場整備事業にかかることとなり昭和56年には、団体営ほ場整備事業にかかる約3000㎡の本調査（第2次調査第1期）・県営ほ場整備事業にかかる部分の範囲確認調査（第2次調査第2期）を昭和56年11月から12月末まで実施した。この調査結果をもとに、遺跡の保存措置を講ずるよう4者による協議が継続されている。

2. 第1次調査

第1次調査は、団体営ほ場整備地区南側約30万㎡を対象として行なった範囲確認調査（第1期）と、協議の結果工事計画との調整を行ないやむなく調査を実施した第2期調査に大きく分けられる。第1期調査では、対象地区ほぼ全域で遺構を確認した。遺構には、堀・井戸・建物・溝・敷石遺構などがある。第2期調査では、建物・堀・井戸・溝土城などを検出した。遺物には、瀬戸・美濃、越中瀬戸、珠洲、越前、伊万里などの陶磁器類、土師質土器、中国製陶磁器が多数出土した。また、溝SD 02から甲冑の草摺部が出土し注目された。（酒井）

3. 第2次調査

a 第1期

調査地区は、白岩川に面した河岸段丘上の約1万3千㎡で、弓庄城跡の西側外郭部にあたると推定した地区である。このうち調査は、ほ場整備事業の施工の関係から記録保存を要する、1区・3区・5区（右図参照）の水田に調査区を設定した。

1区は、調査地区の東側を通る町道に面する高台で、下位面から約2mの比高差をもっている。3区は、5区東側で、5区との比高差1～1.5mを測る。また土塁状の高まり約30cmが南西側にめぐっている。5区は、1区と3・4区の間にある平坦地である。

上記1～3区では、遺構がほぼ全体で検出でき良好な依存状態を示した。特に5区では、大小8棟に及ぶ、獨立柱の建物を検出した。

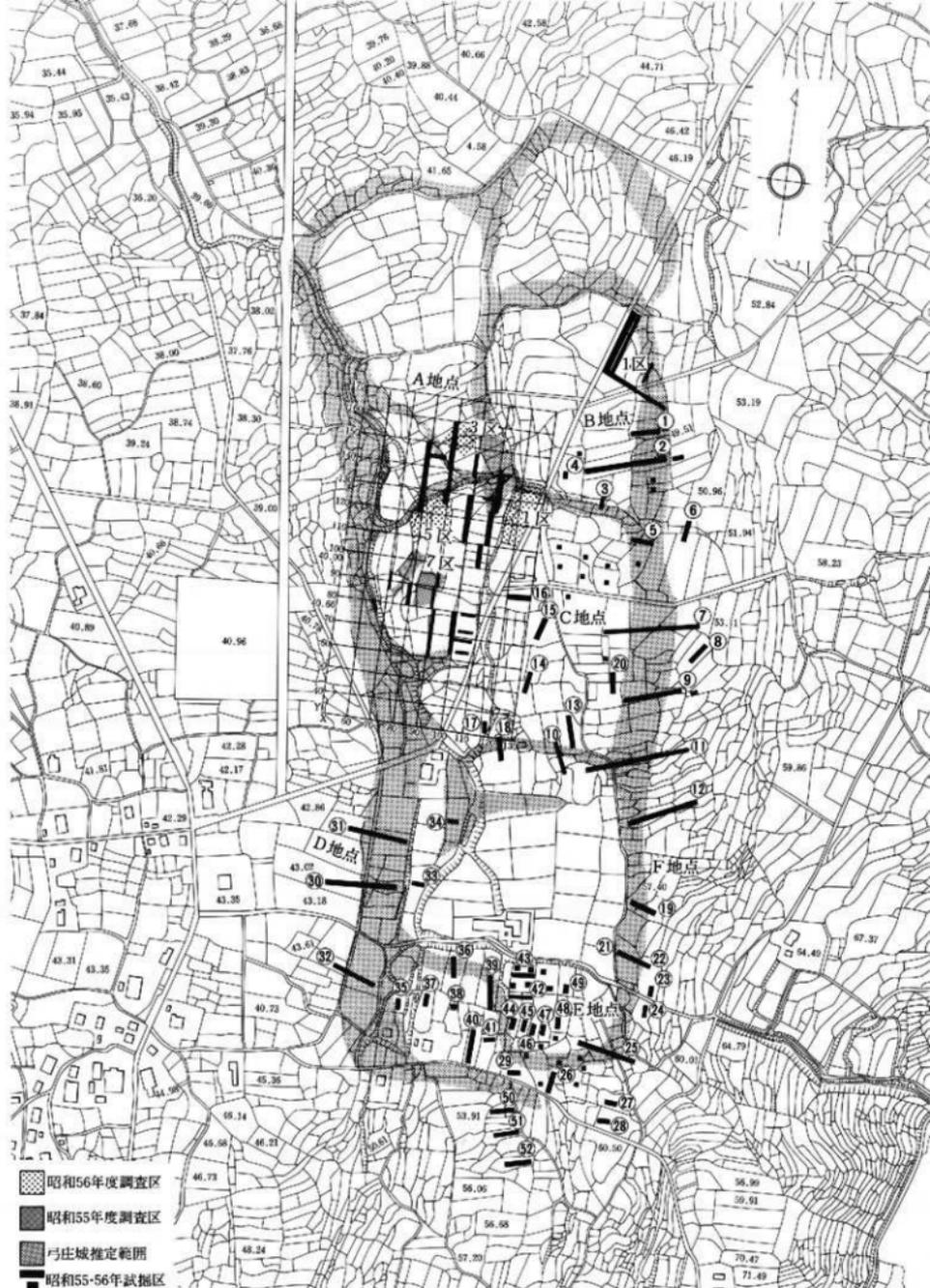
b 第2期

第2期調査の目的は、城跡の範囲を確認することであり、城跡推定範囲の外堀を中心に1m×20m、1m×50m、1m×100mのトレンチを54ヶ所に設定した。また、それと併行して、1m×1mの試掘坑を38ヶ所に設定しそれぞれ堀の確認・層序の調査を行なった。

その結果、一部で、瓦製作用の粘土採掘のため攪乱を受けている箇所があったものの、全体として、遺構は、ほぼ全域で現在の水田・水路・段丘の起伏と一致して検出できた。また、土師質土器、珠洲、瀬戸・美濃系陶器、中国製磁器、金属製品などの遺物のほか、箸・ゲタ・機織具など、多数の木製品が出土した。このことから城は、「土肥家記」の付図「弓之庄古城之図」とほぼ一致することが確認された。

なおこの結果に基づき、郭ごとに、B・C・D・E・F地点に分けた（第2図参照）。

（高慶）



第2図 地形及び区割図 (1/5,000)

(○内の数字はトレンチ番号を示す)

4. A地点の調査

a 1区 (第5図, 図版1・4・8)

調査は1区が他の水田から2mの比高差を持つため、1区全域で実施した。

調査は、昭和56年6月9日から同年8月21日まで、他の3地区・5地区と作業の状況に応じ併行して行なった。同地区の耕土・盛土は、重機で排土した。発掘面積は約1000㎡である。

遺構 (第5図, 図版1)

建物 確認できる掘立柱建物は、合計6棟ある。建物SB101・SB102・SB103は、発掘区北側に位置する。柱間はいずれも2間×1間で、桁行・梁行はそれぞれ5.7m (19尺)、3.9+3.9 (13尺+13尺)・3.6 (12尺)、4.5+3.3 (15尺+11尺)・3.0m (10尺)、2.1+3.3 (7尺+11尺)である。このうちSB102は、土城SK109・井戸SE108に対応しておりSE108の上屋であると思われる。また、SB103は、棟の方向が他の2棟より50°前後西に向いており、SB101・102とには定期的な相異があると思われる。SB104・SB105・SB106は、発掘区南側に位置する。柱間は、SB104 1間×1間、SB105 1間×2間、SB106 1間×3間で、桁行・梁行はそれぞれ、3.3m (11尺)、5.4m (18尺)・3.6m (12尺)、2.4+2.4 (8尺+8尺)・1.8m (6尺)、2.4+2.4+2.4 (8尺+8尺+8尺)である。このうちSB104は、SK112・SE111に対応しており、井戸の上屋としてのSB104が想定できる。以上、建物は6棟であるが、SB101・102・103のある地区とSB104・105・106のある地区では、約40cmの比高差があり区画を意識していたことがうかがえる。また、SB103を除いた5棟は、いずれも城の郭の方向にほぼ平行し弓庄城の遺構であると思われる。

井戸 (図版1) 井戸は全部で4箇所、いずれも人頭大の石がつまっている。すでに記述したようにSE108・111は上屋をもった井戸ではないかと思われる。1区は砂礫の多い地区で、地盤が固いため、いずれの井戸もしっかりした状態で検出できた。また、SE107では井戸わくと思われる切り石が、履土内から検出できた。

この他に、土城・堀など検出された。このうち、堀SD119は、幅6m、底部までの深さ約2mで東から西へ流れるもので、堀り肩は2段の段差をもつものである。郭と郭を区画することを意としたものと思われる。「土肥家記」の付図「弓之庄古城之図」に照合すると、二の丸と三の丸を区画する堀と思われる。

遺物 (第5図, 図版4・図版8)

出土した遺物は、珠洲、越中瀬戸・瀬戸・美濃、越前などの各系統の陶器、土師質土器、中国製磁器と金属製品である。珠洲には播鉢片と甕とがある。播鉢では、体内面におろし目を施さない32・33、体内面へ荒目の帯を引く25・口辺部へ櫛目波状文を施す34・35・36がある。32・33は珠洲第Ⅰ・Ⅱ期、25・34・35・36は同Ⅳ期に属する〔吉岡1981〕ものであろう。その他頸部に櫛目波状文をめぐらす壺15、内面にあて具痕を残す甕37・38がある。このうち37は土城SK114から出土したもので珠洲第Ⅳ～Ⅴ期のものであろう。

土師質土器は口径8cm前後のもの、16cm前後の皿がある。形態的には体部が丸みをもってひらく7～9、体部の上部が屈曲してひらく12・14・16～18がある。このうち、18は内部に、すずの痕が残っていた。越中瀬戸では、内底面に菊の花文を施す1や波状の口縁を持つ23などが特徴的である。瀬戸・美濃系陶器のうち、26～28は、天目茶碗で鉄釉を施した黒褐色のものである。高台はいずれも切高台である。また26は、胎土からみて、瀬戸の天目の磨作の可能性が強いと思われる。中国製磁器は、青磁碗 5・6・10・11、白磁碗 29・30がある。5は、ヘラ状工具により文様を施したもので、暗緑色の釉調を呈する同安窯系のものである。また、図版4・25は、内底面に花文スタンプが施されたもので、淡緑色の釉調を呈する龍泉窯系のものである。11は、染付で底部に「大明年造」と記されている。この他、金属製品として、かんぬきと思われるもの (図版8・17・18) 貨銭 (同24・25) 鉛球 (同27・28) 鉄砲の部品と思われるもの (同29) などが出土している。石器としては、井戸SE111から出土したすりF1 (第6図1～4) がある。

(高慶)

b 3区 (第3・7区, 図版1・4・8)

3区は、5区の北側に位置し比高差1~1.5mを測る。また、南側に東西に高さ30cmの土塁状の高まりがめぐる。5区との間は、幅約4mの溝(堀切)により区切られる(第2区)。

昭和55年度の調査により遺構の存在が推測された。遺構は、南側部分で多く発見された〔酒井 1980〕。

遺構 (第7区) 溝・井戸・建物がある。発掘区は、北側の端部または5区同様の広場部分と思われ、検出された遺構は少ない。

SB201は、2間×3間の東西棟と思われる。柱間は、5.4m (2.7+2.7) × 6.4m (2.1+2.1+2.4)を測り、SD202と重複する。SD202は、SB201に切られる。SD203も底部が残存し遺物は、底面に張り付くように出土している。遺物の出土量は多い。

SE204は、素掘の井戸で直径1.5m、深さ1mを測る。出土遺物は多く、土師質小皿26・27 珠洲7・12・18やフイゴの羽口23 塗器碗(図版8の5)曲物の底板(同3)が出土している。

自然遺物としては、モモの種が10点ほど出土している。

遺物 (第3・7区・図版4・8)

出土遺物には、珠洲、越前、越中瀬戸、瀬戸・美濃の各系統の陶器、土師質小皿、中国製陶磁器、フイゴ羽口、須恵器・縄文土器がある。遺物量は多く、遺構確認面の土層粘質黒色土から出土している。多くは珠洲・土師質小皿で、昭和55年度の調査で出土したものと接合する第3区7と図版4の16・17がある。

珠洲は、壺・甕・すり鉢がある。壺は、大形の第3区7・図版4の16・17と小形の第3区18・24がある。小形の18は、4ヶ所に把手が付く底部は静止承切痕をもつ。大形の壺図版4の16・17は、内面に同心門たきめをもつ。

甕は、小片が多く器形が復原できるものが少ない。I縁が比厚し、外反する第3区8がある。

すり鉢は、内面におろし目をもつ第3区3・11とまたない4~6がある。珠洲は、I~II期〔吉岡1981〕の幅をもつと思われるが概して古式のものが多くみられる。

第3区15は、瀬戸灰釉碗・20は、越中瀬戸鉄軸。第3区22・23は、フイゴの羽口で外面口縁部には厚くガラス状のスラッグが付着している。21は須恵器高台部・図版4の23は越前・同22・24・25・26は、縄文時代の遺物で晩期中葉に位置づけられる。第3区13は、素焼の瓦状で外面に「〇貫九〇」、「〇+之〇」と墨書される。瓦片かもしれない。

青磁(第3区2・9・10)は、雷文を施す2や押花文を柄内底面に施す9などがある。軸は、全面に貫入をしようじている。2は同安窯系・9は龍泉窯系のものと思われる。

白磁(第3区1・9)は、小片を含め7点ほど出土している。1は、口縁部を折り返し断面が三角形状となるもので厚く釉がかりしている。11は、底部である。また、染付(第3区14)がある。外面には草花文様が描かれる。

土師質小皿は、出土量が最も多く3種がみられる。また、法量により小(10cm)、大(15~18cm)の2種がみられる。(第3区16・17、25~27、第7区1~25)。

手づくねによる成形でゆるく外開きとなる皿で大形の(第3区16・第7区9~12・16)と小形の(第7区17~19と小形の第3区27)がある。高台の付く小皿は、高台部をくりぬいた第7区23・24と、円柱状の高台となる第7区8・21・22・25がある。後者は、承切痕を底面に残す。また、碗状の器形となる第7区20がある。

これらの土師質土器は、珠洲I~II期のものと混在して出土しており同期に位置づけられるものであろう。

(酒井)

C 5区 (第2・8岡・岡版2・5・7)

5区は、3区南側・1区西側で比高差1.5mを測る。発掘地点は、平坦面の北～西側部分で多数の建物が検出された。建物は、平坦地のほぼ中央部に位置する4～5間の大形の建物SB301・303・304と、広場をへだてて西側に位置するSB316・317・318と、北側に位置するSB313がある。これらの建物は、広場を中心として整然と配置されていたと思われる。また、その重複関係から3～4回の建かえと、2～3期の時期幅をもつと考えられる。

遺構 建物・土壇・溝・井戸・配石がある。

SB301は、3間×4間 77.2m (2.4+2.4+2.4)×10.7m (2.4|2.7+2.7+2.4)で北東部に位置し、SB303に隣接し、SB304・SB302と重複する。

SB302は、1間×2間 5.8m×10m (7.2+2.8)の建物で等間隔の柱間をもたない。南側には、井戸SE308・309 槽SA305が付随すると思われる。重複は、SB301・303・304・SK311とにみられ、最も新しい建物である。SB303は、SB304とほぼ同軸上で重複する。柱間は、4間×4間 9.6m (2.4+2.4+2.4+2.4)×10.8m (2.4+3.0+3.0+2.4)で両側の柱間がせまい。SB304は、4間×5間で9.6m (2.4+2.4+2.4+2.4)、10.8m (2.4+3.0+3.0+3.0+2.4)で、SB301・303と同様の柱間となる。東側には、槽SA336・337がみられ、それぞれSB303・304に付随する。SB313は、広場の北側に位置する。柱間は、1間×2間 2.7m×4.8m (2.4+2.4)を測る。SB315・316は、重複して広場の西側、SB301～304に向い合う。SB315は、1間×2間 30m×60m (3.0+3.0)の柱間、SB316は、1間×2間 3.9m×7.2m (3.6+3.6)の柱間をもつ。

この西側部分には、柱穴が多数存在するため、他にも建物が存在する可能性をもつ。また、この部分は、平坦地の西端にあたり1.5mほどの比高差をもつ。西側段丘上は、せまい平坦地となり3区へつづく。

SB318は、1間×3間 4.5m×5.7m (1.8+2.1+1.8)で東西に長い柱間をもち東側柱間に直径1m深さ60cmほどの土壇SK319・320・321が配置される。建物の東・北側には、雨落ち溝と思われるSD322がみられ溝の西端には、水溜の土壇と思われるSK324・325を設ける。

井戸は、3ヶ所みられる。いずれも素掘で、人頭大の石を投げ込み埋められていた。

SE308・309は、SB303・304と重複し切る。両者ともほぼ垂直に掘り込まれている。SB302に付随と思われる。SE307は、発掘区の東南端に位置し、直径約2m、深さ約1.8mを測る。内から銅製品(図版7の16)が出土している。土壇は、4ヶ所にみられ方形のSK311・312と不成形のSK310・322がある。SK311は、SB303・304を切り、SB302に切られる。

SX354・355は、配石で黒色土内に20個ほどの河原石を積み上げたように検出された。

遺物 第8岡・岡版5

出土量は、少ない。珠洲、瀬戸、越中瀬戸、土師質小皿、青磁、白磁がある。

珠洲は、Ⅱ期と思われるすり鉢第8岡10とⅤ期と思われる壺図版5の29がある。

青磁は、SB301の柱穴内から第3図5が出土している。

土師質小皿は、SB301柱穴内から第3図1～3・8が、SB304から(4)がSB306から(5)が出土している。

いずれも、糸切痕を底部にもつもので、3区同様、珠洲Ⅰ～Ⅱ期に位置づけられるものである。

第3図17・18は、口縁が比厚し、外開きとなるもので、7区などで主体的に出土している。また、第3岡、4・7も、珠洲Ⅰ～Ⅱ期に位置づけられる。(浜井)

d 7区

調査区は、7区の中で8区寄り(北側)に位置する。地山(遺構検出面)は黄色の砂礫層と砂層で、調査区全体にみられた。地山は、西に向ってゆるやかな傾斜を持ち、標高は46mを測る。

遺構(第9図)

検出した遺構は、掘立柱建物7棟・井戸2箇所・溝1条・柱穴などがある。遺構は、調査区全体にみられるが、溝SD02の南側約2m幅の間には遺構が少なく、溝に接する建物などはみられない。

建物は、掘立柱建物7棟があり、調査区の中央に集中している。桁行1間のものが多く、梁行は1~3間をもつ例がある。1×1間の建物は、SB27・28の2棟があり、溝SD02と桁行が平行する。1×2間例は、SB24~26・28の4棟があり、SB24・25は溝と桁行が平行し、他は直交する。1×3間のものは、SB29の1棟である。柱間寸法には、7・8・10・11・14・19の完数尺を使っている。長棟では、梁行柱間が短くなり、方棟は桁行柱間が短くなる。梁行柱間は、同尺をくり返し用いる。SB29は、特に細長い平面形の長棟で、梁行中央の柱間寸法は19尺と最大規模を示す。この建物は、柱痕痕跡の平面形が方形である点・掘り方の規模と特徴が似ている点から同一建物とみているが、1×1間の建物2棟に分かれ、対峙する配置をとるのかも知れない。また、他の建物に比べて大きな柱を使った可能性がある。これらの建物の桁・梁行方向は、ほぼ同一となるが、SB30は少し東偏し、他とは異なる。他地区では、大規模な建物(3×3間以上)がみられるが、ここでは確認していない。

井戸は、調査区の西と南の2箇所検出した。井戸SE31は、平面形が方形を呈し、一辺約50cm・深さ約1mを測る。断面形は「U」字状を呈し、SB25の北西隅に接して所在する。SE32は、直径約60cmの円形を呈し、断面形は「U」字状で、深さは約90cmである。この井戸に近接する建物は、確認出来なかった。

溝は、調査区の北側に1条みられた。溝SD02は、幅約3mを測り、断面は「U」形を呈するが、北側壁は途中に段を持ち、幅約1mの平坦面をつくり出す。

遺物(第9図、図版5)

遺物の種類は、中世に属する珠洲・土師質小皿・中国製磁器他と鉄製品他の金属器の2種がある。その他の時代のものとしては、須恵器・陶器他がある。土器は、遺構ごとにまとめて図示した。

珠洲4・15は、破片である。14は、口縁部が直立し、肥厚して端部が凹む特徴を持ち、吉岡康輔氏の珠洲編年[吉岡 1981]の第Ⅲ期にあたる。15は、14と同じ特徴を持つが、肩が上位で張る点と部厚い器肉となる点が異なり、第Ⅳ期に比定できる。また、両者は、井戸SE31から出土した。

土師質小皿(1・2・4・6・7・9・10・12・16~29)は、器形より、口縁部が直線的に斜め上方に伸びるものと強く外反して口縁部が水平となる2者に大別できる。前者の口縁端部は、丸く終わるもの・肥厚するもの・肥厚してつまみ上げるものに細分出来る。後者の口縁端部の変化は少なく丸く終わる例が多い。口縁部内外面に煤が付着するものは多く、16は顕著にみられる。7・19の底部には、回転糸切り痕がみられ、珠洲第Ⅰ~Ⅱ期に比定できる。口縁端部をつまみ上げる特徴は、珠洲第Ⅴ期頃までみられる。本遺跡出土例の大半は、先に述べた特徴を持つため、限定は出来ないが、第Ⅳ~Ⅴ期のもつとみられる。口縁部が強く外反する器形は、珠洲第Ⅵ~Ⅶ期にみられる特徴で、23・24は同時期と考えられる。土師質小皿の時期は、珠洲第Ⅰ~Ⅶ期にわたる資料がみられる。

中国製磁器は、青磁碗(13)と青磁香炉(3)がある。13は、溝SD02から出土しており、外面に先端が尖った直線的な蓮弁をめぐらす。3は、外面上部に方形の区画文と下部に平行線文を持つ。これらの時期は、珠洲第Ⅳ期頃であろう。これらの土器は、12~17Cまでのものがみられ、土師質小皿が主体を占める。

この他に、染付碗(11)・瀬戸碗(8)などがあり、前者の時期は14~15C頃と考えられ、後者は16C末~17C頃とみられる。5は、須恵器杯身で、7C後半といえる。金属器(図版7)は、「くぎ」と「ヨロイ」破片他がある。(橋本)

5. B地点の調査

a 1区

調査は、ほ場整備事業の計画に、排水路に予定されている地点を中心に、4m×55m、2m×60mのトレンチを設定し堀・建物などを検出した。また、調査は、現道路・農業用排水路を除き実施し、2m×2mの試掘坑を4ヶ所設定し、工事計画と遺跡の関係を把握した。この結果、排水路を除く箇所では遺跡に影響がないことがわかり、この部分については調査の必要性がないことを確認した。なお、基本的層序は、茶灰色土（耕作土）暗褐色土（第2層）黒褐色土（第3層）黄灰色土（遺構面）であった。

遺構（第6図、図版3）

遺構としては、道路ぞいのトレンチ中央の堀と、このトレンチに直交するトレンチで検出できた掘立柱の建物がある。堀は、掘り肩が第1地区のSD119と同様2段になっており城の郭を区画する主要な堀であることが推定できた。幅は、最も広い所で約14mを測り、深さは遺構面から、60cm前後であった。また堀の両側には、50cm内外の石がならべられており、土塁、あるいは石垣などが構築されていた可能性もある。この堀の中からは、多数の木片が集中して出土しており、堀へ木片を投棄したものと考えられる。この堀は、城跡全体からみて、北側の外堀りと推定される。

掘立柱の建物は、東西2間、南北1間分を検出したが、南側に農業用排水路が流れていたため、南北棟か、東西棟かの判断はつかなかった。この建物で特筆すべきは、礎板が敷かれていたことで、柱穴に7枚の板が交互に敷いてあった。また、この建物は50cm内外の石がならべられており、土台あるいは亀腹などの施設を持っていたことも想像される。なお、柱間は2.1m（7尺）を測る。

遺物（第6図、図版6・8・9）

出土した遺物は、珠洲、越中瀬戸、瀬戸・美濃などの各系統の陶器、須恵器、土師質土器、染付、中国製磁器、各種木製品、金属製品である。

珠洲は、播鉢片であるが、2つのタイプに大別できる。1つは、内体面に、おろし目を施さず、口縁部が内湾する15（第6図）、内体面に荒目の櫛目を施し、口縁部に櫛目波状文を施す17（第6図）がある。前者は、珠洲第Ⅰ・Ⅱ期後者は、同Ⅴ～Ⅶ期〔吉岡1981〕に属するものであろう。

土師質土器は、口径12cm前後のもの、10cm前後のものがある。形態的には、体部が丸みをもってひろく第6図7・8、平底で体部の上部が屈曲してひろく第6図6、底面に糸切痕を残す第6図5・11がある。このうち5・11の糸切りは、いずれも回転糸切りである。

越中瀬戸はいずれも皿で茶灰色の釉が施されたものである（第6図、9・12・19・20）。このうち、19・20には底部裏面にそれぞれ「前」と「△」の墨書がある。

中国製磁器では、青磁碗と灰釉の碗・染付がある。青磁碗14（第6図）はヘラ状工具による文様が施してある。釉調は淡緑色を呈する同安窯系のものであると思われる。灰釉の碗16（第6図）は、内底面に花文スタンプを施してある。22は、外面が灰色、内面が乳白色の釉調を呈している。21（第6図）は染付で、淡い藍色で文様が描かれている。

木製品（図版9）は堀から出土したものがほとんどで、板片が多いが、それに混入して、円筒の棒、4、墨書のある木片6・ゲタ11、機械具の部品と思われる12などが出土している。このうち6（第8図、23）は、「〇午ニ書」と判読できた。ゲタ11は、木で作られた長さ18cmで、小形のものである。

金属製品（図版8）には、キセルの吸い口（2）・小づかの柄（10）・かんざし（15）・刀の目貫（19）・開元通宝（20・23）・元武通宝（21）が出土した。10・15は銅製品、19は金製品で、草履をモチーフにしたデザインである。こうかい（15）は、梗の文様が刻まれたもので、銅製品である。

6. 第2期調査

昭和57年度から、弓庄・鎗城跡に駅営ほ場整備事業が施工される計画があり、これにともなう、城跡の保存対策の一貫として、範囲確認調査を行なった。トレンチは、基本的に外堀、内堀など、城を区画する遺構を中心に、層序・遺構検出を行なった。この結果、郭の位置・配列などが確認されたので、それに合わせて、本丸部分を除き、B地点からF地点までを設定した(第2図)。以下、各地点ごとに状況を記す。

B地点

この地点は、郭の配置からみて三の丸にあたる地区である。ここでは、すでに記したように、第1地区の調査で外堀、建物などを検出しているが、その他に、第1トレ・第2トレ・第3トレ・第4トレを設定した。

第1トレでは、トレンチ西側からなだらかな傾斜を持つ堀を検出した。この堀は、東西幅で約20m、深さは最も深い所で80cmを測る。第2トレでも第1トレ同様の堀を検出しており、一連の外堀であると判断した。また、第2トレ西側では、柱穴を検出したが、建物かどうかは判断がつかなかった。第3トレでは、A地点第1地区で検出した堀S D 119に続くと思われる遺構を検出した。幅は約10m、深さは70cmで流れの方向は東から西である。その他、5ヶ所で試掘坑を設定し、層序を確認した。堀の部分では、表土(1層)茶褐色土(第2層)暗茶灰色土(第3層)黒褐色土(第4層)で、他の部分では、1層から3層までの基本的層序を形成しており、遺構の残存状況は良好であった。

C地点

この地点は、郭の配置からみて、二の丸にあたる地域である。トレンチは、5トレ・7トレ・9トレ・10トレ・11トレ・13トレ・14トレ・15トレ・16トレ・17トレ・18トレを設定した。5トレ・7トレ・9トレ・11トレでは、B地点で検出した外堀に続くと思われる堀を検出した。このうち、11トレでは、堀が二重にめぐらされていた。城の内側の堀は幅5m、深さ約2mを測る。また、外側の堀は、ゆるやかな傾斜を持つもので、幅約20m、深さ約80cmであった。内側の堀と外側の堀は、約5mの間隔であった。10トレ・18トレでは、本丸と二の丸を区切るとと思われる堀を検出した。10トレでは、幅約2.5m、深さ約1.8m、18トレでは、幅約3m、深さ約2mを測る。

トレ13・トレ14・トレ15では、柱穴・溝・井戸を検出したが、建物が立つかどうかについては、不明である。また、数本の溝が検出されたがおそらく、郭内部を区切る溝であろうと思われる。試掘坑は6ヶ所設定したが、いずれも基本的層序を保っていた。

D地点

この地点は、本丸西側の白岩川の河岸段丘、直下の地点で、外堀の検出を目的とした。トレンチは、トレ17・トレ30・トレ31・トレ32・トレ33・トレ34をそれぞれ設定した。この地区は、現在、軟弱な水田である。トレ30・31・32では、外堀を検出したが、粘質土が約1.5mほど積っており、非常に軟弱な土質である。この堀は、なだらかな傾斜をもっているが、本丸下では急に深くなり、落ち込んでいる。「弓之庄古城之図」にも、この付近は「フケ田」となっており、軟弱な土質であったことがうかがえるが、軟弱な水田を利用して構築したのか、沼状の堀を、構築したのかについては判断がつかなかった。トレ33・34は、堀のある水田面からの比高差約2mで、堀の内に入る地区であるが、遺構は検出できなかった。

E地点

この地点は、本丸南側一帯である。トレンチは、25~29・35~52までを設定し、それぞれ遺構の検出を行なった。この結果、トレ25でなだらかな傾斜を持つ堀を検出した。この堀は、B・C地点で検出された外堀につながるものであろうと思われる。また、トレ40・42では郭を区画すると思われる堀が検出された。トレ37では、石組みを検出した。これは、半平面を持つ30cm角の石が方形に組まれたものである。その他、トレ36では柱穴を検出したが、建物であるかどうかは確認できなかった。

このE地点は、近年行なわれた、瓦の土取りのための攪乱が各所で認められたが、土取りが水田一枚ごとを単位に行なわれたことにより、遺構の残存している箇所と、そうでない箇所が明確に判別できた。

F地点

この地点は、城跡、東側一帯で、6トレ・8トレ・12トレ・19トレ・21トレ・22トレ・23トレ・24トレを設定した。トレ12・19・22・21ではそれぞれ、幅12m、深さ1.5mの堀を検出した。これは、B・C・E地点で検出した外堀と、一連のものと思われる。この堀から東では、遺物がわずかながら発見されたものの、遺構はまったく検出できなかった。

以上、B・C・D・E・Fの各地点についてそれぞれ、その状況について記した。その結果、推定できた城の範囲は、本丸部分を除いて、約90,000㎡と予想される。(高度)

遺物 (第3・4図、図版6・7)

遺物は、堀内から出土したものと包含層から出土したものが大半で、時代は、縄文時代から近世に至る各時代の遺物が混在して出土している。遺物には、珠洲、越中瀬戸、瀬戸・美濃、伊万里、土師質土器、須恵器、縄文土器、中国製陶磁器、磁石など多数出土している。また、堀内からは、木製品(板・箸・塗器・ゲタ・柱根など)が出土している。

瀬戸・美濃系の陶器は、天目(第3図49~57)・皿(第4図1・3・6・30~32・36・37・40)とその他に第3図5がある。天目は、鉄釉が厚く施され高台はヘラケズリによるケズリ出し高台である。高台は、ケズリ出し方法に差がみられ、外底面が平坦なもの(50・53)、中心部へゆるく盛上がる(49・55~57)がある。前者は、チューリップ状の器形、後者は、椀状となるもので、越中瀬戸と思われる。皿は、外底面に厚く灰釉が施され、内面押花文スタンプを施す36がある。40は、脚付の大皿。5は、外面に数条の沈線を引き、淡黄褐色の灰釉を施す。

越中瀬戸は、皿・おもり・鉢・天目がある。皿(第4図2・4・16~20・29・34・35)は、外面を口縁から高台部まで直線的に作り出すもので、高台部断面は、台形又は逆三角形となる。外底面は、高台から中心部にゆるく盛り上がり高さが高台とほぼ同じとなるものもある。釉は、鉄釉(茶・黒)が多く、灰釉(黄)のものもみられる。

2は、口縁部は小波状となる皿。4は、口縁の立つ小鉢。38は灰釉の小壺。39は、口縁の立つ広口壺で内外面にきめ細かな鉄釉が施される。45は、すり鉢で、近世のものと思われる。29は、外底面に「本」カと墨書される。その他に、おもり(33)がある。

白磁(第4図6~9・22)碗と皿がみられる。碗(6~8・22)には、厚く釉が施され口縁部断面三角形の6、「く」の字に外反する口縁をもつ7・8・22がある。皿は9・23は、「く」の字状で外反する口縁をもつ。

青磁(10~15・26~28)は、小片だが出土量は多い。

11は、小形碗で釉は青緑灰色で貫入がみられる。28は、幅5mmほどの工具により、半円形状のシノギハ文様が施される。内口縁にはヨコナデ痕が観察できる。他は小片だが、碗の口縁と思われる。

皿は、青緑色で貫入が入る10・12や、内面にクシ状工具により文様を施す13がある。底部は、ケズリ出しによる凹底となる。

珠洲は、甕・すり鉢がある。すり鉢は、小形でおろし日をもたない(第4図44)やおろし日・波状文をもつ図版6・3・4・7がある。土師質小皿は、糸切底をもつ第3図38・39・47・48や口縁部がやや比厚する第3図31~36・41~46がある。前者は珠洲Ⅰ・Ⅱ期、後者は、Ⅴ・Ⅵ期のもと思われる。木器(図版8)は、曲物の底板1・用途不明の12・ゲタ10がある。(酒井)

Ⅲ ま と め

1. 弓庄・館城跡の城構えについて

弓庄・館城跡の城構えについては、すでに述べたように「土肥家記」の付図「弓之庄古城之図」によって語られてきたが、今回の調査で城構が一部確認できたので調査結果に基づいて述べることにする。

城跡は、南北約600mに細長く伸びており、南から北へ、本丸・二の丸・三の丸と大きく分けることができる。郭の配置は、本丸・二の丸・三の丸が、ほぼ一直線上に配置されるもので、白岩川の河岸段丘上に立地する平山城的構造から考えて、典型的な「連郭式縄張り」の城といえる。この城の構造は「弓之庄古城之図」とも、ほぼ一致しており、この古図を立証する結果となった。

郭は堀によって区画されているが、一定の型式を持つ堀であるかどうかについては、今後の調査を待たねばならない。ただ今回確認された堀を大別すると、次の2種類となる。1つは、自然の谷、あるいは傾斜を利用したと思われる堀で、東側の外堀がそれに当たる。また、本丸西側D地点で検出した堀も、泥湿地で堀の形は明確につかめなかったが、おそらくこの例に属する堀であろうと思われる。もう1つは、堀の両肩が2段に掘られたもので、A地点第1地区・B地点第1地区で検出されたものが、その例に既当する。

以上のことから、弓庄・館城跡は、自然の立地を利用して、外周を築き、それに合わせて内部を構築していったものと思われる。

城の全体の立地は、東側を山地が屏風のようにつつみ込み、西側は、白岩川が流れており、自然の要害を形成している。しかしながら、険しい山の頂上部に構築される山城と異なり、平野部との比高差約7mの台地上に立地しており平山城もしくは、平城の範疇に属するものと思われる。有事の場合の防衛的配慮もさることながら、交通の便などにも配慮がなされていたことが想像される。

(高慶)

2. 弓庄城の年代について

調査より発見された遺物は、第1次調査同ようほぼ平安時代末から江戸時代に至る各期の遺物がみられる。弓庄城等の遺構に関係すると思われる古代から中世の遺物は、珠洲編年〔吉岡1981〕では、ほぼⅠ期からⅥ期に至る遺物と思われる。中でも、土肥氏が堀江庄に入部したとされる14世紀中ごろから、城を開け渡す16世紀後半(1583年)と考えると珠洲編年の後半期の遺物が主体となり、珠洲は、Ⅴ期以降・15世紀以降と思われる瀬戸・美濃系の陶器がそれにあたる。その他には、珠洲Ⅰ・Ⅱ期(12世紀～13世紀前半)の遺物・17世紀以降と思われる越中瀬戸がある。

遺物からみた年代は、調査より発見された遺構と考え合せると、3区・5区で発見された建物SB301・303・304・313・316～318・201は、3区で主体的に出土した底部に深切痕をもつ土師質瓦が伴出しており珠洲Ⅰ・Ⅱ期に編年される。また、1区・7区・8区では、溝SD 02・建物柱穴などから珠洲Ⅴ期以降の遺物が出土している。このようなことから遺構群は、大きく弓庄城築城以前、弓庄城築城以後、弓庄城開け渡し後の3期に分けられよう。また、現在まで、珠洲Ⅲ・Ⅵ期に伴う建物は検出されていない。

第1期 弓庄城築城以前に存在した建物(3・5区)で珠洲Ⅰ・Ⅱ期に位置づけられる建物。

3区建物SB201・井戸SE204はほぼ同期と思われる珠洲Ⅱ期に位置づけられる。

5区建物SB301・303・304・313・316～318は同期と思われる。建物SB301・303・304は、ほぼ同一の方位をもち重複し、同時に建ち並ぶことは不可能である。建物は、一時期に主殿(SB301・303・304)と思われる1棟と、付随する建物(SB313・316・317)が1棟建てられていたと思われる3回の建て変えが行なわれたと推測される。これらの建物は、完数尺を用いた総柱建物で企画性をもち配置されている。同期と思われる建物群は、立山町若宮B遺跡〔狩野1981〕、上町神田遺跡〔橋本1981〕などにみられ、いずれも弓庄城の建物と似る。この様相は、珠洲Ⅰ・Ⅱ期に位置

づけられる2遺跡と共通の企画性と思われ、同様の性格をもつ建物群と推測される。

第2期 弓庄城に伴う建物群で城の縄張り、郭の築造が同時に行なわれたか明確ではないが1・7・8区の建物群がある。建物は、多く2間×1間の柱間をもち、桁・梁行の柱間がそれぞれ異なる完数尺を用いる。中には、井戸・土城などの上屋的なもの(SB102・104)や、1間×3間の柱間をもつSB106・29などがある。7区では、建物に3～4回の重複が認められ、いづれも直行または平行に配置されることから、一定の地割に従い建物を配したと思われるが、建物の柱間が完数尺を用いても一定ではなく雑然と配されたと思われる。これは、弓庄城築城を緊急に行なった結果「堀江城が天正の初め上杉謙信に攻られ落城し、弓庄城に本城を移した」とすれば、短期間に本城の城構を整備したため地割の乱れを生じたとも考えられるが、3～4回の建物の重複(建て変え)は、これらのことを裏づけるものとは、考えがたい。むしろ弓庄城は、16世紀中ごろには、すでに現在確認された城構えと建物の配置がなされていたと思われ、城構えは15世紀後半に、その原形ができていたと考えたい。

第3期 弓庄城が、開け渡された後に作られたと思われる建物で、17世紀以降のもの。

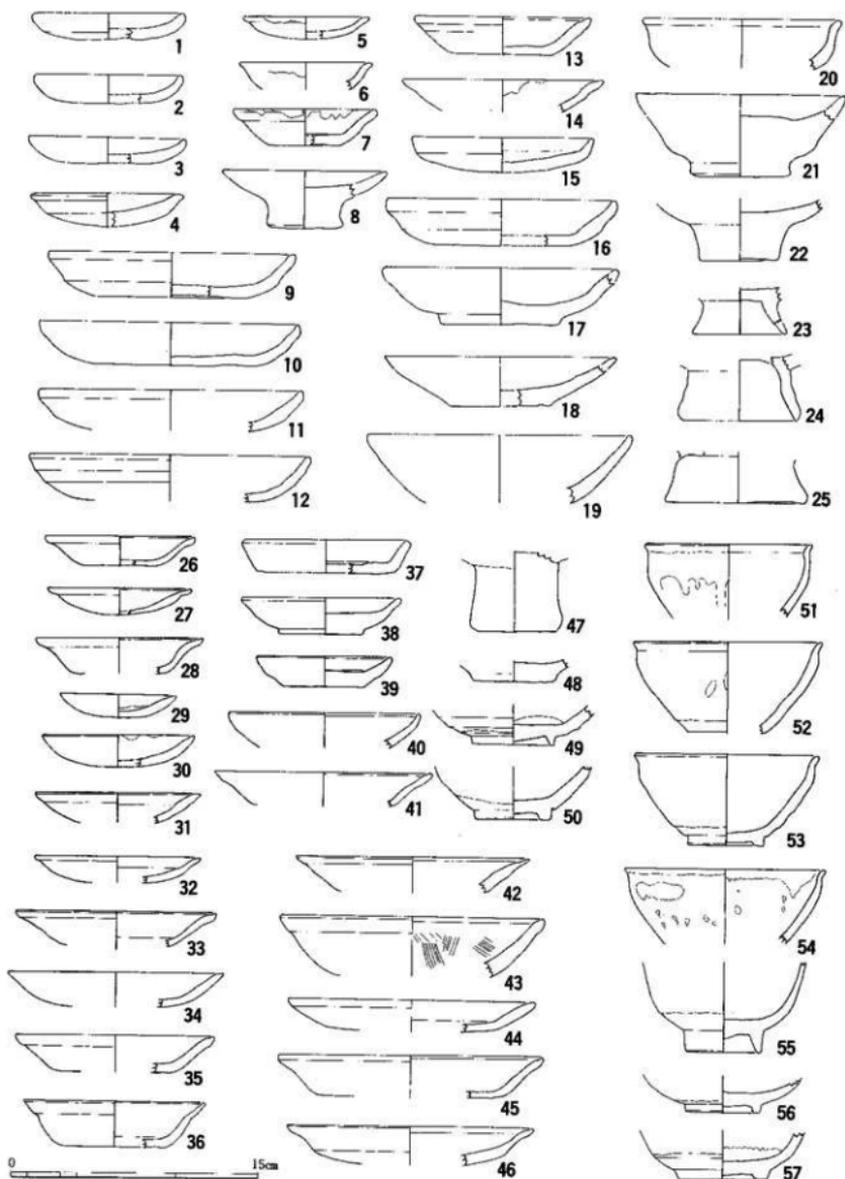
5区SB302と思われ、単独に建てられた建物で、1期の建物を切る。同様の建物は、本城南側で2棟発見している。また、越中瀬戸など、近世陶器類が多く出土することも城が開け渡された後も形状を変え存続していたことを裏づけるものであろう。

以上、調査で確認された問題点を列記したが、弓庄城のありかた・時代等については今後の課題としておきたい。

(酒井)

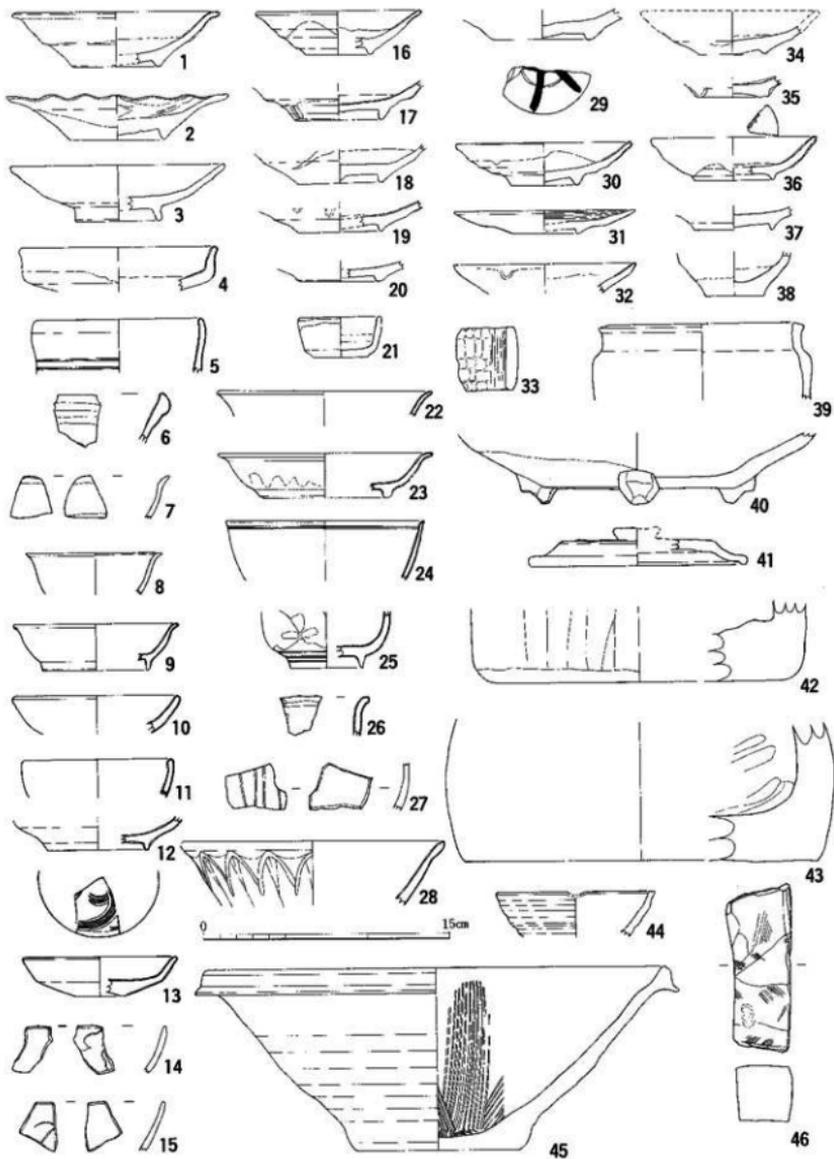
—引用・参考文献—

- イ 石原与作 1956 『白岩川中流域の歴史的事実—弓庄・寺田郷の研究—』
石原与作・奥田淳爾 1977 『中世の荘園』 『立山町史』 立山町
- カ 加賀藩 1934 『加能越三州地理志稿』 石川県図書館協会復刻
狩野 睦 1981 『北陸自動車道遺跡調査報告—立山町遺構編—』 『若宮B遺跡』 富山県教育委員会
狩野 睦 1982 『北陸自動車道遺跡調査報告—立山町土器・石器編—』 『若宮B遺跡』 富山県教育委員会
- サ 酒井重洋・神保孝造・橋本正春・奥村吉信・高慶 孝 1981 『富山県上市町弓庄城跡緊急発掘調査概要』
上市町教育委員会
定塚武敏 1974 『越中のやきもの』 富山文庫2 巧玄出版
- タ 高岡 徹 1980 『富山県 城郭解説』 『日本城郭大系』 7 新人物往来社
富田景周 1933 『越登賀三州志』 石川県図書館協会復刻
富山県 1975 『富山県史』 『資料編中世Ⅱ』 富山県
- ナ 内藤 昌 1979 『城の日本史』 NHKブックス C7
檜崎彰一 1977 『瀬戸』 『世界陶磁全集3 日本中世』 小学館
- ハ 橋本正春 1981 『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町遺構編—』 『神田遺跡』 上市町教育委員会
橋本正春 1982 『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町土器・石器編—』 『神田遺跡』 上市町教育委員会
- ム 村上 男 1981 『富山三太良遺跡出土の陶磁』 『貿易陶磁研究』 第1号 日本貿易陶磁研究会
森田神園 1951 『越中志徴』 富山新聞社刊 石川県図書館協会復刻
森田 勉 1981 『鎌倉出土の中国陶磁器に関して』 『貿易陶磁研究』 第1号 日本貿易陶磁研究会
- ヨ 吉岡康暢 1976 『越前・珠洲』 『日本陶磁全集』 7 中央公論社
吉岡康暢 1977 『越前・珠洲』 『世界陶磁全集』 3 小学館
吉岡康暢 1981 『日本やきもの集成—4—』 『北陸—珠洲—』 平凡社
米沢佳彦 1977 『武將たちの足跡』 『立山町史』 立山町



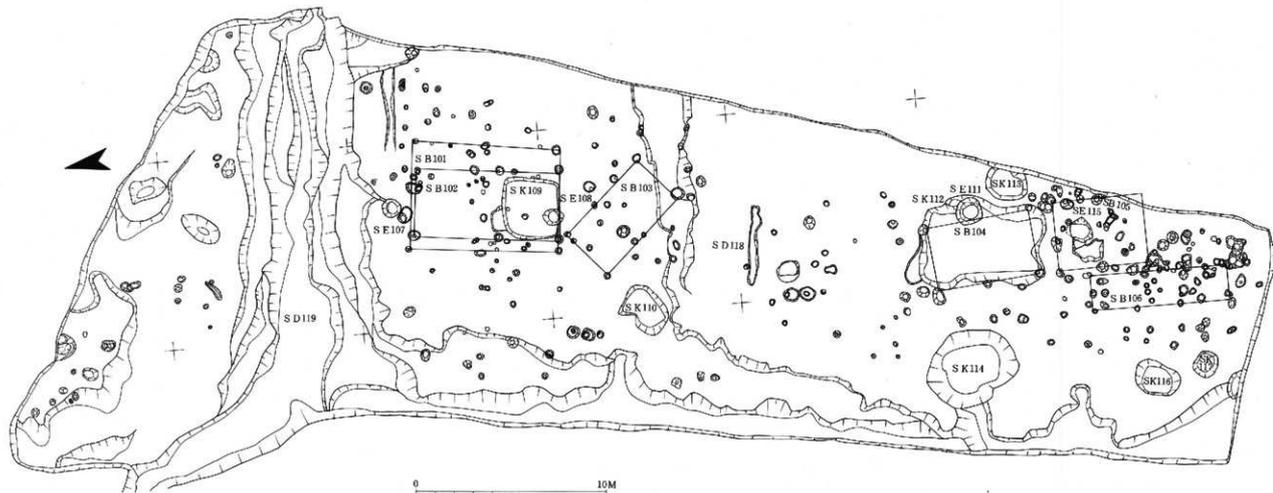
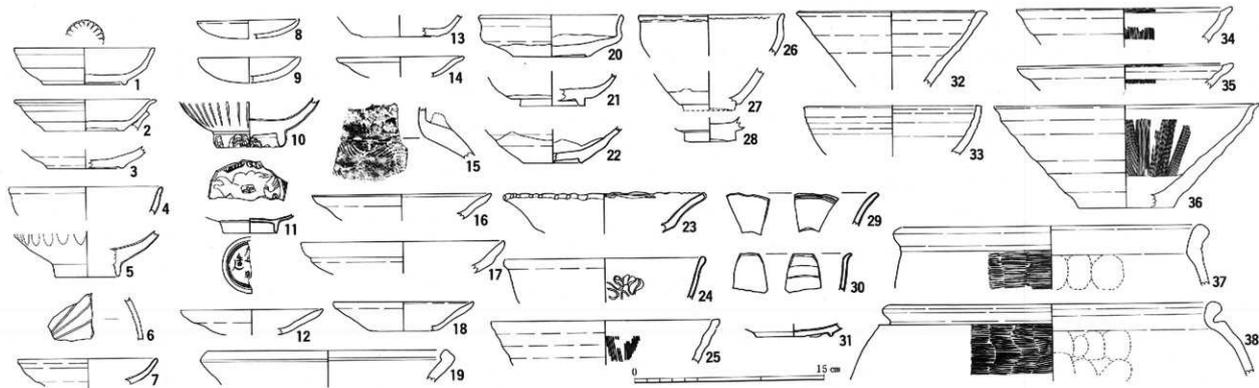
第3図 A地点3区出土遺物 (1~25)・第2期調査出土遺物 (26~57) (1/3)

トレ1(26), トレ2(30・37・45・51・55), トレ3(38), トレ9(27・43), トレ10(56), トレ11(36・40・50),
 トレ12(31・39・42), トレ21(52), トレ22(33・34), トレ25(49), トレ30(35), トレ31(44), トレ32(32・46・47),
 トレ36(54), トレ37(53), トレ39(28), トレ47(57), トレ48(41), トレ50(29), トレ52(48)



第4図 第2期調査出土遺物 (1/3) 44 (1/6)

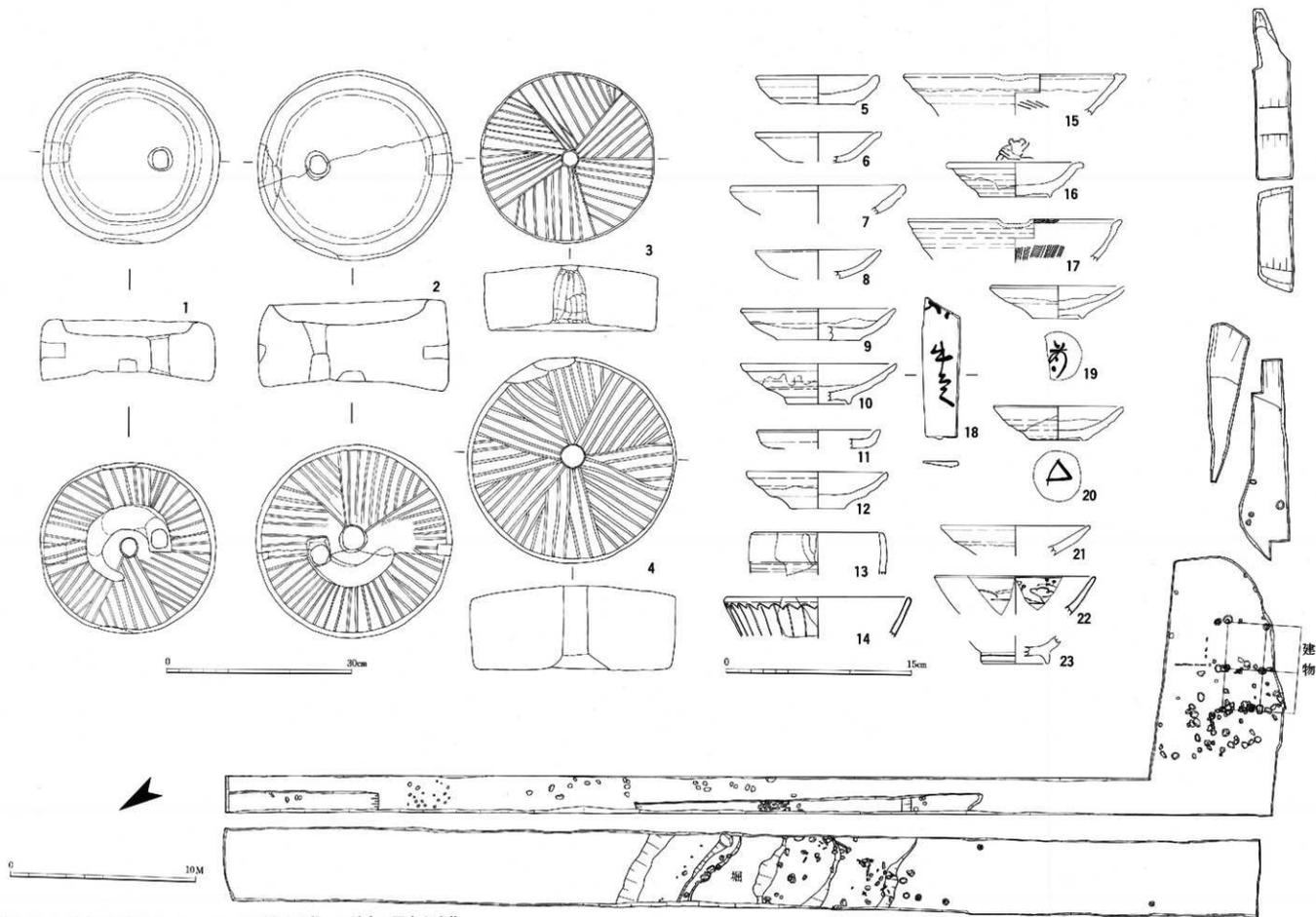
トレ1(6・35), トレ2(3・16・25・26・36), トレ4(11), トレ6(14), トレ7(7・8・15・27), トレ8(28),
 トレ11(40), トレ20(44), トレ21(29), トレ25(12・22・23・24), トレ30(2・9・18), トレ31(10・17),
 トレ32(13・41), トレ34(33・38), トレ35(42・43), トレ36(46), トレ46(39), トレ47(37・45), トレ48(31),
 トレ50(34), トレ51(20・21), トレ52(1・4・5・19・30・32)



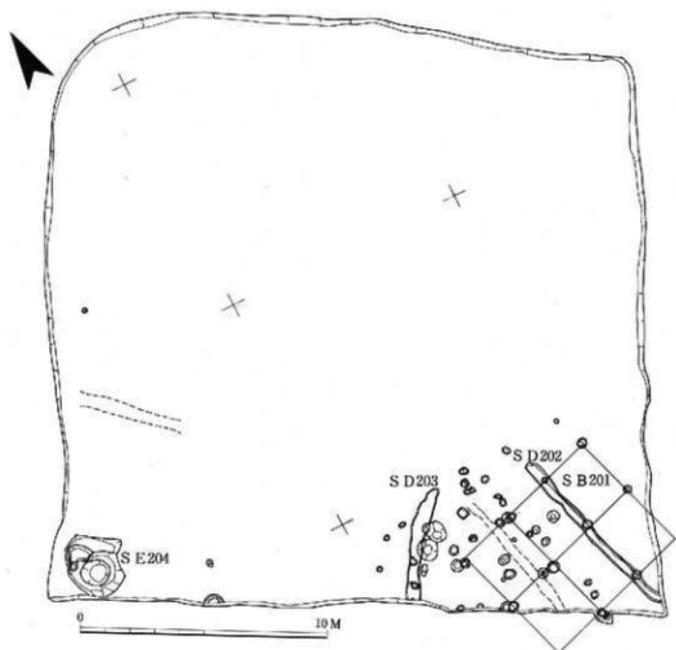
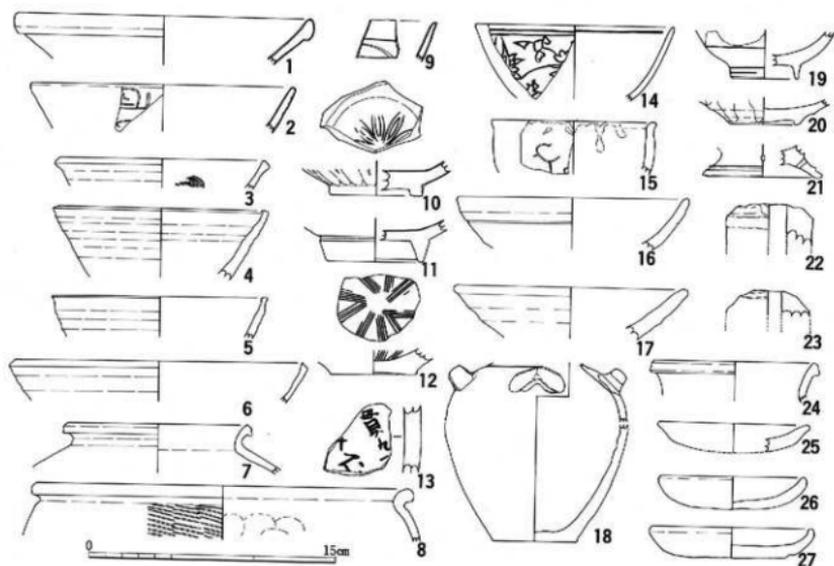
第5図 A地点1区発掘区(1/200)及び出土遺物

1~24・26~31(1/3), 25・32~38(1/6)

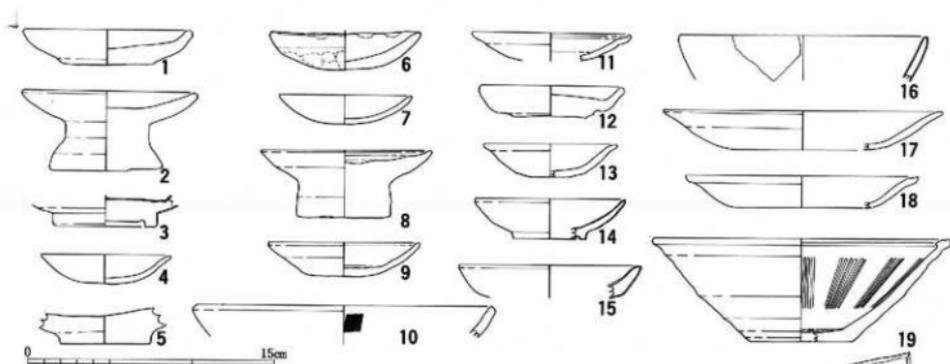
SE108(2), SE115(7), SK104(1), SK109(3), SK112(4・5・6), SK114(8・9・10・37)



第6图 B地点1区发掘区 (1/200) 及び出土遺物・A地点1区出土遺物
 A地点1区 SE104 1~4 (1/6) B地点1区 5~16, 18~23 (1/3)·17 (1/6)



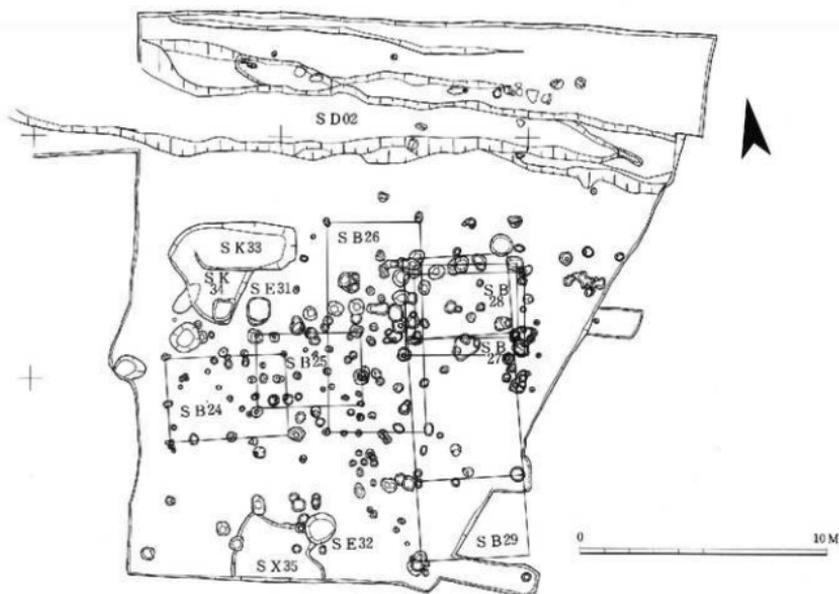
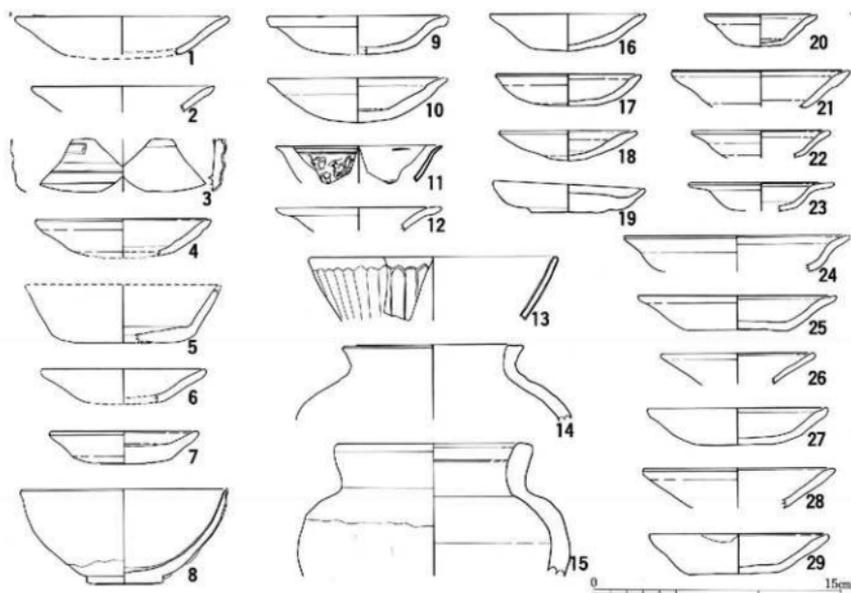
第7図 A地点3区発掘区 (1/200) 及び出土遺物
 1・2, 9~11, 13~17, 19~23, 25~27 (1/3) S E 204 (7・12・18・23・26・27), S E 201 (16・25)



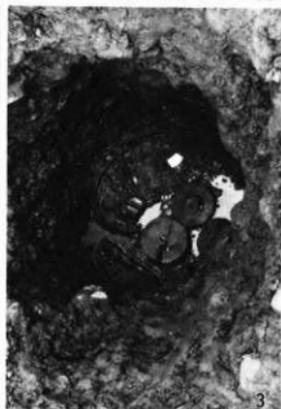
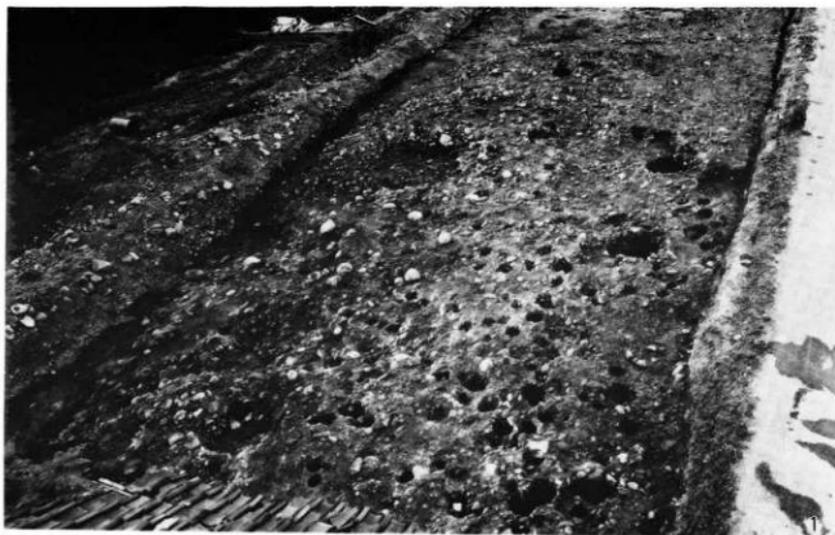
第8図 A地点5区発掘区 (1/200) 及び出土遺物

1~9 11~18, (1/3), 10・19(1/6)

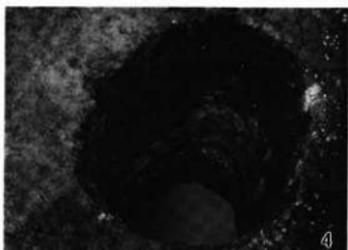
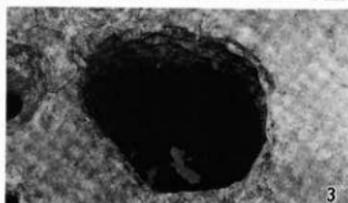
SB301(1・2・3), SB304(4), SB312(7), SB341(8), SK306(5), SK311(6), P12(12), P14(9・11)



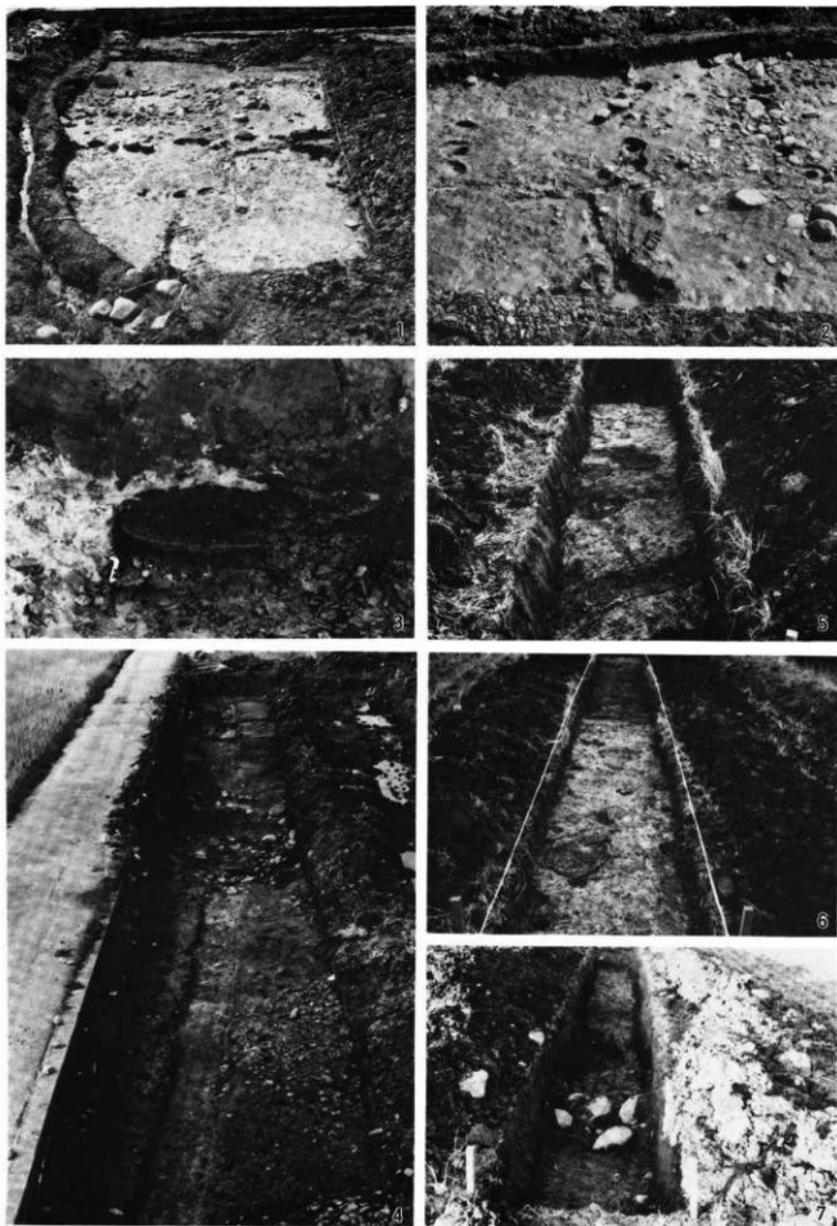
第9図 A 地点7区発掘区(1/200)及び出土遺物 1~29 (1/3)
 S B27(1・2・3), S B29(4・5), S B30(6・7), S D02(12・13), S E31(8・14・15), S E32(10),
 P 4(9・11), P 11(16), P 14(17・18・24), P 15(20・21・25), P 20(22), P 21(26), P 22(27), P 25(28),
 P 26(23・29)



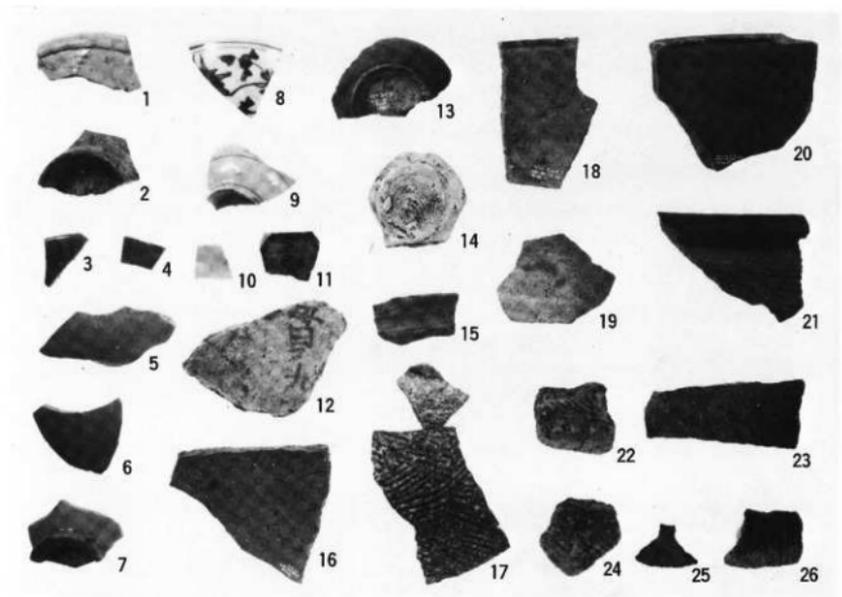
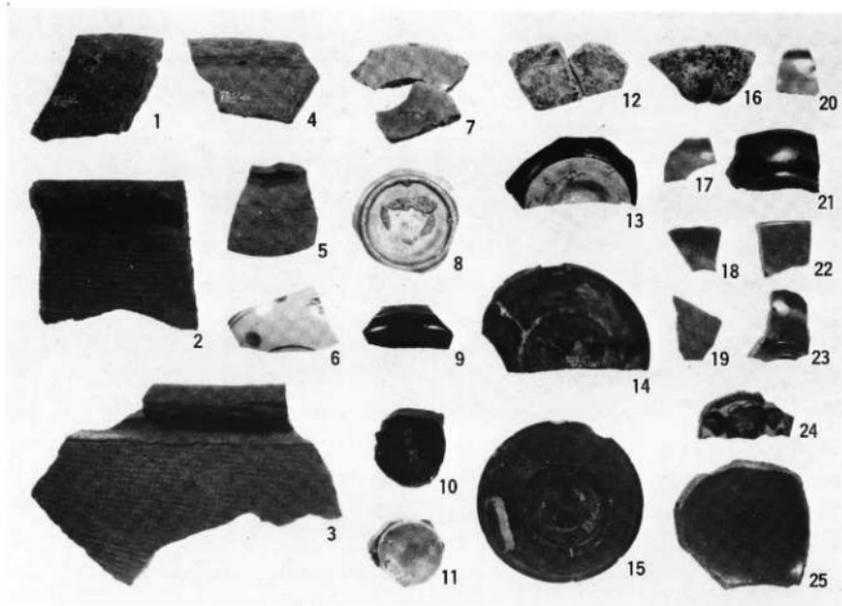
図版1 A地点 1区 1. 南より 2. 北より 3. SE104
3区 4. 西より



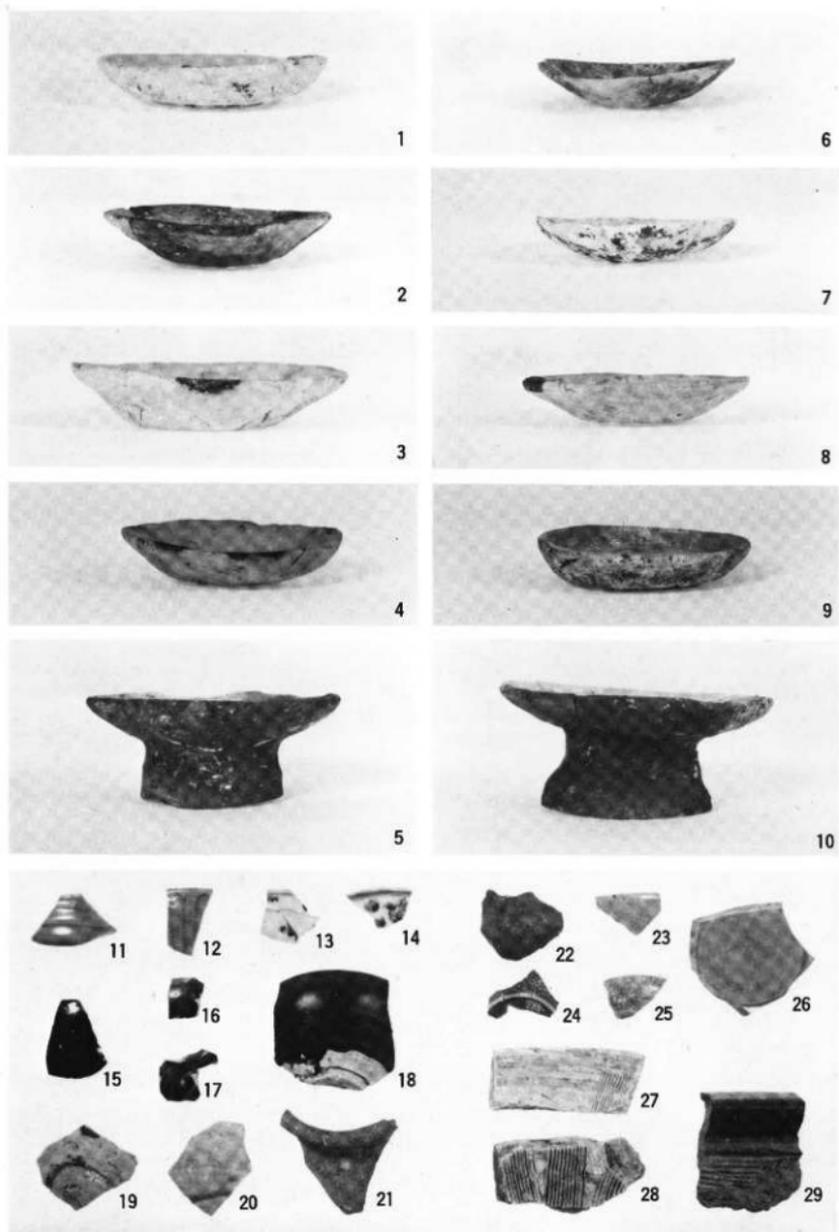
図版2 A地点5区 1. 南より 2. SB318ほか 4. SE307
7区 3. 西より 5. SE31



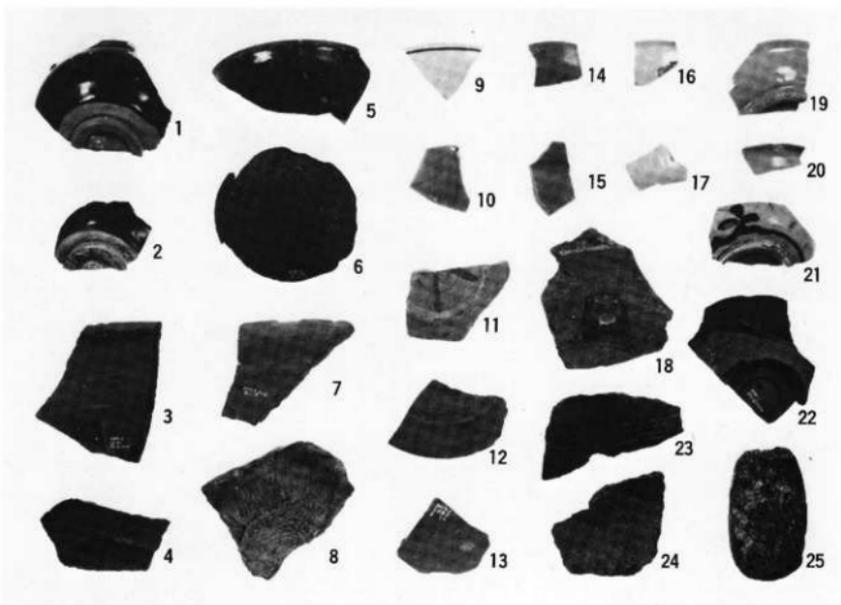
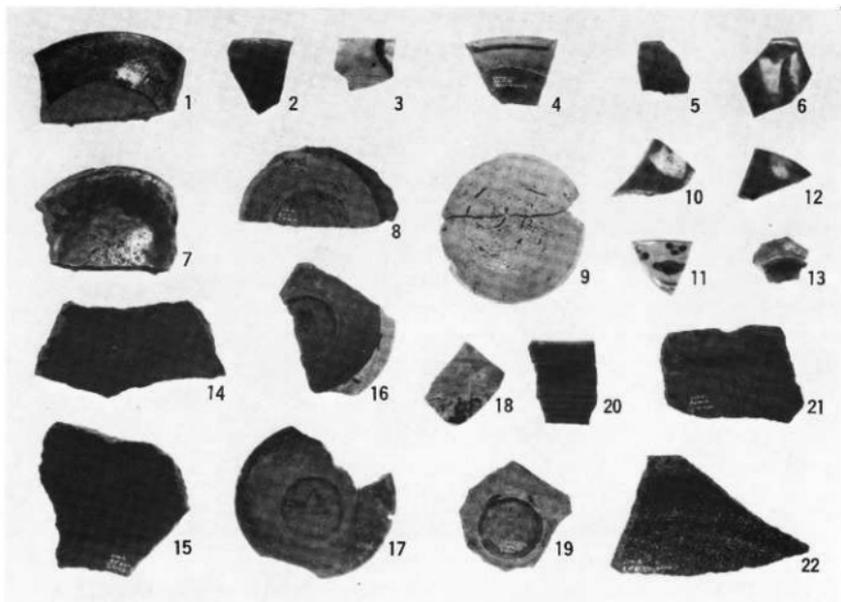
図版 3 B地点1区 1. 東より 2. 南より 3. ゲタ出土状況 4. 南より
 第2期調査 5. 15トレ 6. 14トレ 7. 47トレ



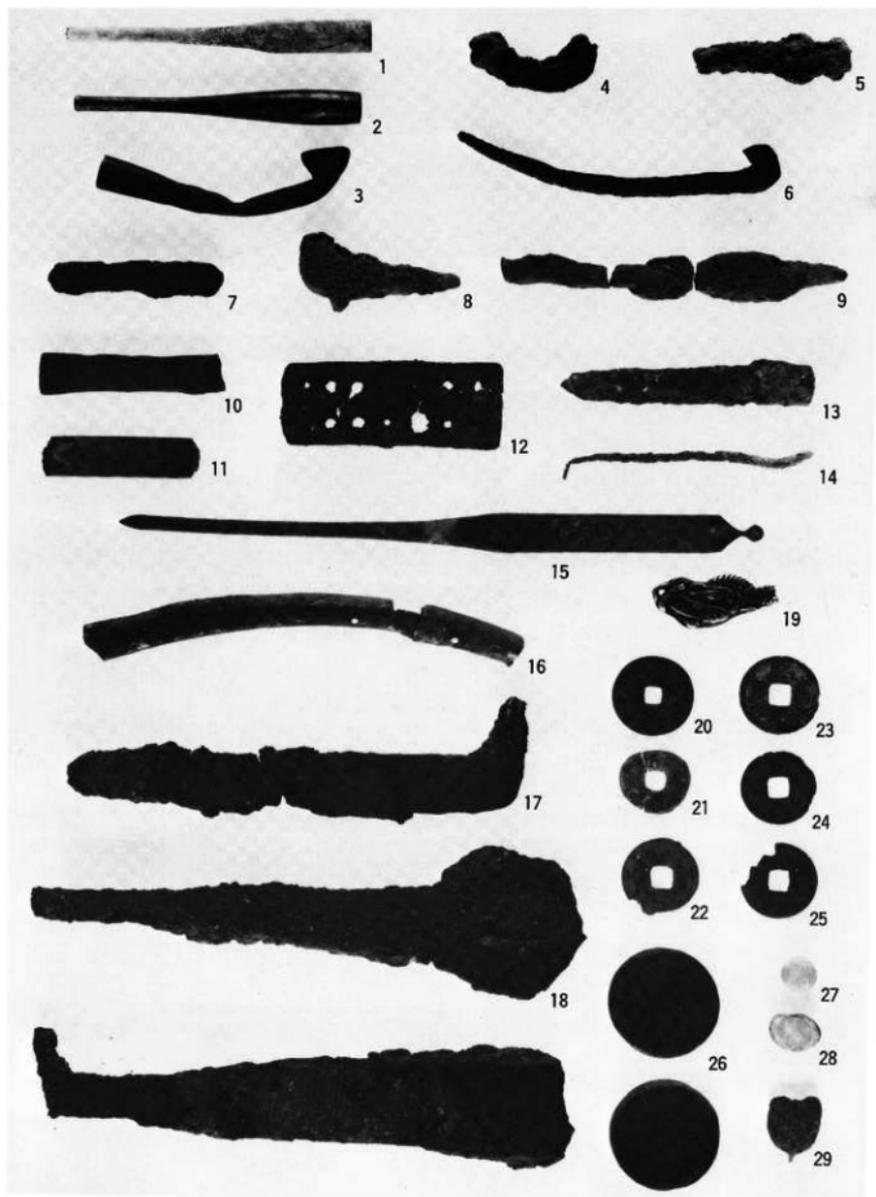
图版 4 A 地点 1 区(上段), 3 区(下段)出土遗物(1/3)



图版5 A地点5区(4~10, 22~29) 7区(1~3, 11~21), 1~10(1/2), 11~29(1/3)

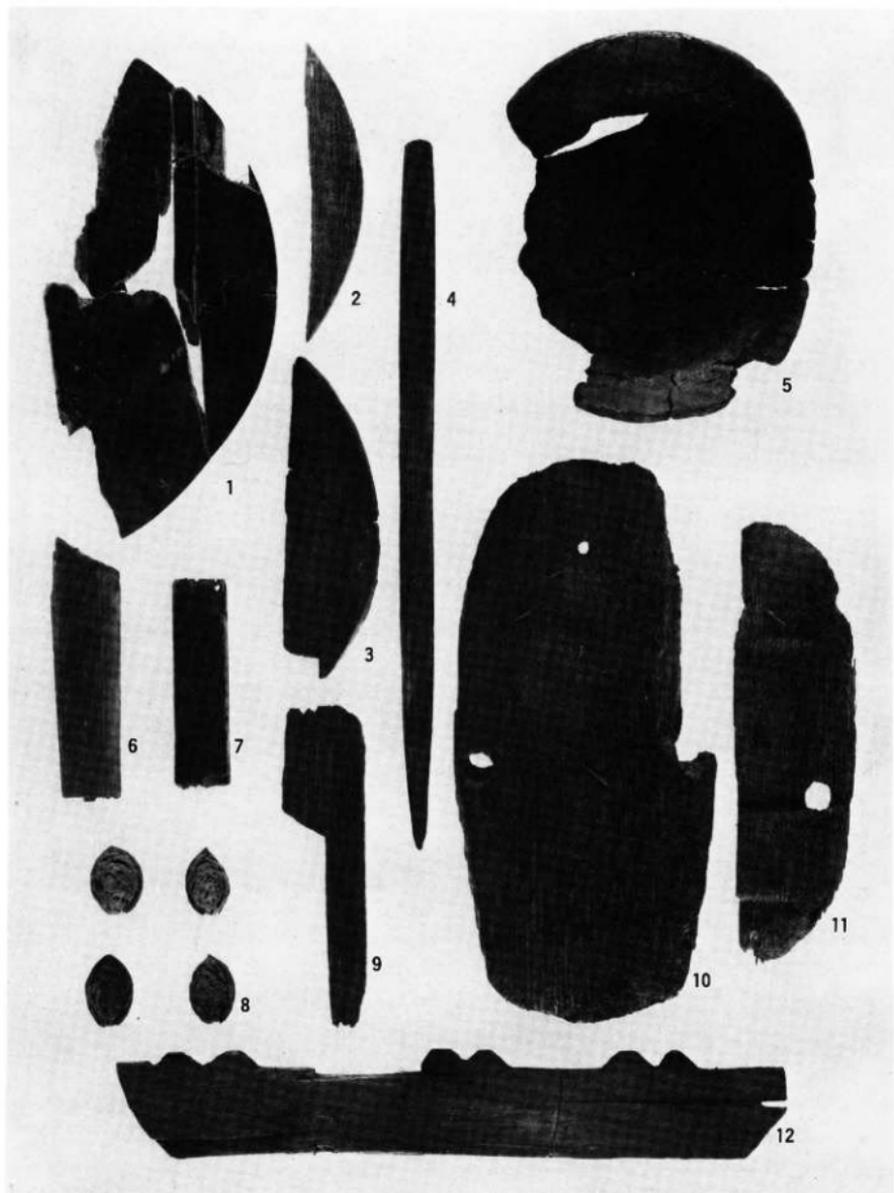


图版 6 B地点1区(下段)·第2期调查(1/3)



図版7 金属製品 (2/3)

A地点SB102(4), SE107(29), SK114(8), SE307(16), 1区(7・9・17・18・24・25・27・28), 5区(4), 7区(12),
 B地点1区(2・10・15・19・20・21・23・26), 2トレ(1・6), 11トレ(11), 12トレ(5・13), 23トレ(22), 30トレ(3)



図版8 木製品 (1/2)

A地点3区SE204(3・5・8) B地点1区(4・11・12)

1トレ(6) 9トレ(1・7・9・10) 30トレ(2)

富山県上市町

弓庄城跡

第2次緊急発掘調査概要

発行日 昭和57年3月31日

発行者 上市町教育委員会

編集者 富山県埋蔵文化財

センター

上市町教育委員会

印刷者 (株)日本海印刷